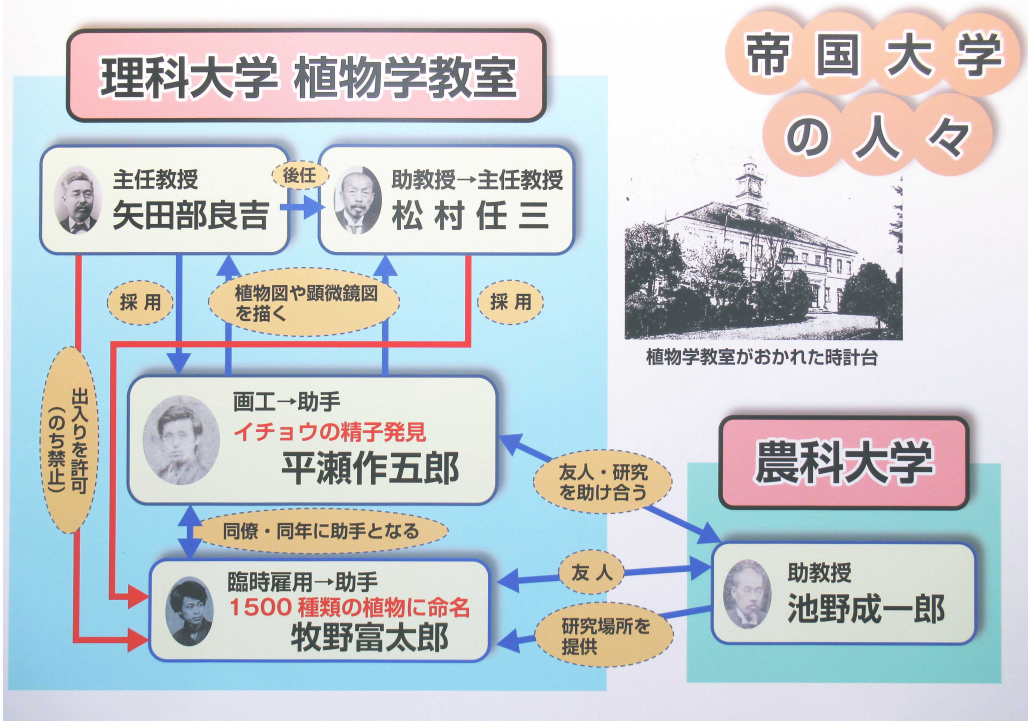
まなびや

日本の近代植物学創成期の帝国大学理科大学植物学教室



我が国の近代植物学の創成は、一八七七（明治10）年代の東京帝国大学理科大学（現・東京大学理学部）植物学教室を中心に展開されました。当時は、まだ先例のない研究で学生も少なく、情報も人材も不足する時代でした。そのような状況の中、植物研究家の牧野富太郎と、画工としての腕を買われた福井出身・平瀬作五郎の二人を植物学教室が受け入れ、一八九三（明治26）年二人は同時に助手に任命されました。

▼植物学教室の主任教授 矢田部良吉（やたべりょうきち）と松村任三（まつむらじんぞう）

平瀬が画工として就職した一八八一（明治14）年当時、植物学教室の主任教授は矢田部良吉でした。矢田部は植物学以外にも、新体詩、ローマ字運動、女子教育など、明治時代の学術や教育界に大きな影響を残しました。

矢田部は本業の植物学でも優れた研究者でしたが、植物図や顕微鏡図については、平瀬に信頼を寄せ数多くの図を描かせました。

矢田部の後には、弟子で助教授の松村任三が教授となりました。

▼生涯の友人、池野成一郎

帝国大学農科大学の池野成一郎は、平瀬の研究や論文発表を後押しした人物です。

平瀬が初めてイチョウの精子を発見した際、池野はその重要性を考えて適切な助言をしたばかりでなく、平瀬の論文をドイツ語やフランス語に翻訳する際に手助けをしたといわれています。

そらから、１か月後には池野もソテツの精子を発見します。その論文作成には、平瀬が図を描くなどの支援も受けていました。

帝国大学紀要に掲載されている、ソテツに関する池野の論文には、図のページの約半分に「S・Hirase」と記載され、池野のために平瀬が精巧な図を描いたことがわかります。平瀬が大学を去っても、二人の友情は生涯にわたって続きました。

▼牧野と平瀬の共同作業

牧野富太郎は生涯に一五〇〇種以上の植物を命名しました。その中には、当時彦根の学校勤務の平瀬に採集標本を依頼したオオトックリイチゴがあり、新種と判断して学名に平瀬の名を入れています。

牧野富太郎採集のオオトックリイチゴ標本

世界に誇れる平瀬の業績

一九八八（昭和63）年、植物の形態構造および機能に関連した分野の研究者で構成される、日本植物形態学会が設立されました。同会は、イチョウの精子発見の百周年にあたる一九九六（平成８）年、その功績をたたえて「平瀬賞」を新設しました。

この賞は、植物形態学の進歩に寄与する、独創的で優れた論文に与えられるものです。また、学会のロゴマークはイチョウの葉と精子を組み合わせたもので、平瀬の発見が世界に誇れるものであることを示しています。

日本植物形態学会「平瀬賞」盾